

買い物に行けない「買い物弱者」をどう救うのか

島根県雲南市「かもマート」



小売店の撤退、自動車運転免許の返納などで、食料品などの買い物に行けない高齢者が増えている。農林水産省では生鮮食料品店まで直線距離で500メートル以上、かつ65歳以上で自動車を持たない人を「買い物弱者」と定義したが、その数は全国で825万人に及ぶ。そんな人たちは地方の過疎地域から首都圏のベッドタウンにまで広がっている。買い物弱者をどう救えばよいのか。島根県雲南市の実情と取り組みに密着した。(ノンフィクションライター・山川徹)

山間地域で食料品を販売する軽バン

色づいた山の斜面には、家屋が窮屈に点在していた。開けた平地には、稲刈りを終えた田んぼが広がり、澄んだ川が流れている。周囲には、商店やコンビニはおろか、住民の姿も見当たらない。



加茂町の山間地域を走るかもマートの移動販売車



2019年11月上旬の午前10時過ぎ。秋晴れのどかな景色のなかを〈生活応援隊 かもマート〉とロゴが書かれた白い軽バンが走っていく。島根県雲南市加茂町の中心部である加茂中駅近くにあるスーパー「かもマート」は、毎週火曜日、買い物に困った住民向けに移動販売を行っている。

「かもマート」のスタッフである中林喜美子さんは、加茂中駅から車で5分ほどの民家の駐車場に軽バンをとめると、「おはようございます！」とインターホンを押し、発泡スチロールや段ボールなどを玄関先に並べていく。

玄関からサンダルばきで出てきたのは、カーディガンを羽織った高齢の女性である。園田とき子さん（仮名）は1935年生まれの84歳。2年前に夫を病気で亡くしてからは、山あいのこの家で、1人で暮らしている。



総菜、弁当、納豆、豆腐、みかん、もやし、トマト、カップ麺、調味料、菓子…。園田さんは、腰をかがめて、玄関先に並ぶ箱に入った商品の一つひとつ手に取っていく。

（移動販売車の商品を選ぶ84歳の女性）

「旦那が亡くなるまでは車で買い物に行っていたんだけどね。私は免許を持っていないから、どこにも行けなくなっちゃって……」

最寄りのスーパーまでは3キロほど。若いころは自転車で通えたが、高齢となったいまは難しい。毎週木曜日、長男の妻が運転する車で病院に行き、その際に買い出しも行う。それ以外では、毎週火曜日にやってくる移動販売が、買い物ができる唯一の機会だ。



移動販売の商品

園田さんは、昼食用の総菜とだしのもとのほか、おやつ用のフレンチトーストをつくるためのパンと牛乳、卵を購入した。

「ずっと農業一筋だったから自分が食べる野菜は畑でとれるの。でも、お店に行かないと、お魚やお肉、調味料は買えないでしょう。それに電球とかトイレットペーパーとか日用品がなくなったときは困る。旦那が亡くなってからは本当に不便になった。もしも移動販売がなかったら、ここで暮らしていないかもしれない……」



園田さんたちが暮らす集落から、さらに10分ほど軽バンが走る。こぢんまりとした住宅地に入ると、すでに4、5人の高齢女性が立って、移動販売車を待ちわびていた。

手押し車を椅子代わりにして、おしゃべりをしている。最高齢である88歳の女性は言う。

「この集落から一番近いスーパーまでは2キロほどかな。オラも去年までは車を運転して買い物に行っていたんだけど、息子たちが年寄りの事故が怖いっていうから免許返したんだ。いまは、たまに嫁に買い物をお願いしてる。でも、頼んだものしか買ってきてくれないし、気を使うからな。こうして自分で見たものを自分で選ぶのが楽しいんだね」

手押し車を支えに腰を曲げて商品を吟味する。そんな姿からすれば、子どもたちに免許返納を勧められたのも不思議ではない。「かもmart」の移動販売の利用者たちの言葉には、小売店がない農山村で移動手段を失ったとたんに日常生活が一変する切実さがにじんでいた。

雲南市加茂町の山間部は、最寄りのスーパーやコンビニまでは1キロから3キロほど離れていた。「かもmart」の移動販売の利用者はみな80代。農水省や経産省が定

義する買い物弱者にあてはまる。



利用者と話す「かもマート」の中林喜美子さん

「誰かがこの地域の食を守らなければならない」

雲南市は、2004年に加茂町、大東町、木次町、三刀屋町、掛合町、吉田村の6町村が合併して誕生した。現在の加茂町の人口は、5886人（2019年12月末）。うち65歳以上の高齢化率は37.4%。全国平均である28.1%を大きく上回る。

2017年10月、同町の青木隆史さん（50）は買い物問題に対処するため、「かもマート」を立ち上げた。青木さんが言う。

「商売として成立するのは疑問でした。なぜなら、それまでに本業の食料品店さんたちが撤退せざるをえないような状況だったからです」

青木さんの実家は、祖父の代から加茂町で衣料品店を営んでいた。1970年代後半、加茂町の商店街に軒を連ねた小売店は19店舗。だが、店舗は次第に閉店、2007年には最後の食料品店がなくなった。いまでは青木さんの衣料品店を含め、5店舗しか営業していない。

「商店街の食料品店や近くのスーパーがなくなってからも、多くの人が勤務先の松江市や出雲市の大型量販店で買い物していました。でも、年をとって、仕事をやめたり、免許を返納したりしたとき、買い物をする場所が周囲になくなっていました」

雲南市商工会加茂支部部長をつとめる青木さんのもとには、買い物をする場がなく困っているという高齢者の声が届いていた。毎日2キロの距離を自転車で往復している、足腰が弱って遠くへ行けない……。青木さんは、苦境を知るにつれて「誰かがこの地域の食を守らなければならない」と考えるようになった。



かもマートに杖をつきながら来店した女性（撮影：山田真実）

2017年、青木さんは雲南市商工会議所加茂支部の役員とともに「かもマート」をオープンした。商工会館を改装した90平方メートルの小さなスーパーだが、商店街には食料品店が実に10年ぶりに復活した。さらに翌2018年からは買い物に悩む住民の要望に応え、移動販売もスタートした。

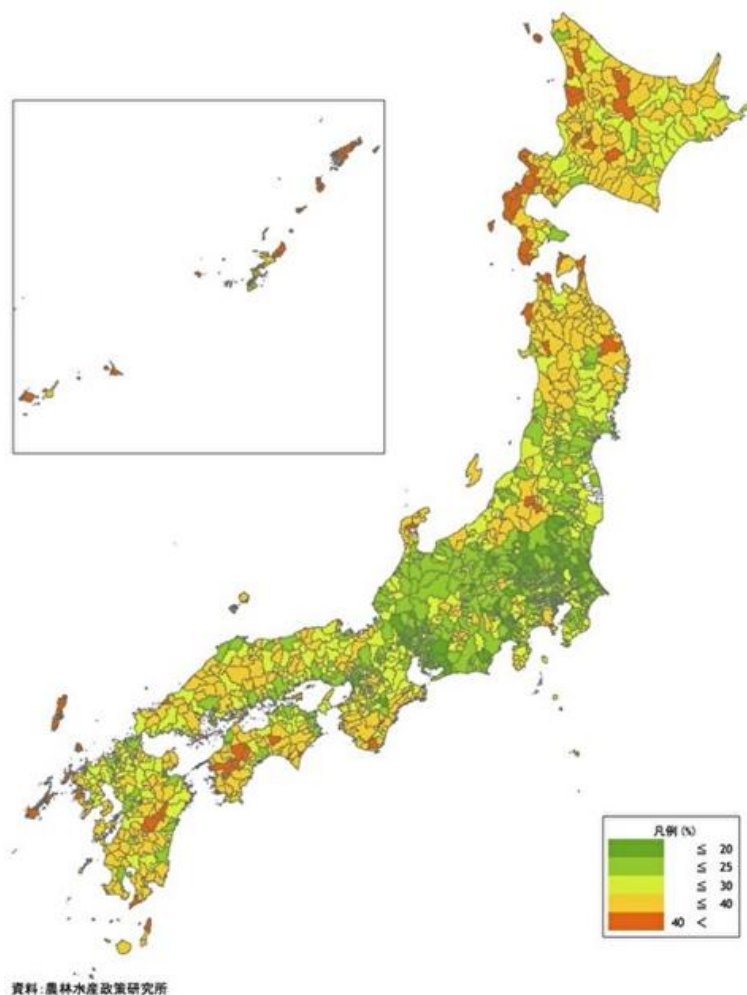
買い物弱者対策には「食料品店の開業」「商品の配送」「利用者の送迎」「買い物代行」の四つが有効だとされる。「かもマート」は、「店舗」を営業し、「移動販売」するだけでなく、いつしか「送迎」と「買い物代行」も行うようになっていたと青木さんは話す。

全国で 825 万人の買い物弱者

「買い物弱者」とは、小売店の廃業、商店街の衰退などで、高齢者を中心に食料品の購入に不便や苦勞を感じている人たちのことだ。

農林水産省では「生鮮食料店まで直線距離で 500 メートル以上、かつ 65 歳以上で車を持たない人」と定義しているが、経済産業省や総務省でも類した定義のもと調査を行ってきた。農水省では全国で 825 万人（2015 年）、経産省では 700 万人（2014 年）と推計されている。

この問題は買い物時の不便だけでなく、さまざまな悪影響を引き起こす。たとえば、高齢者の外出頻度の低下による生きがいの喪失、遠い商店に通う途中での転倒など事故リスクの増大、食品の多様性の低下による低栄養化、それにともなう医療費や介護費の増加などである。



買い物弱者（2015 年 食料品アクセス困難人口）の比率を示した農林水産政策研究所のマップ。市町村別に明示され、緑色から黄色、オレンジになるほど買い物弱者の比率が高い（出典：農林水産政策研究所）